

農業委員、農協の役員

老人会 会長

神社、お寺の総代

等一通りおつとめを終わり、今は無役。世代交代して、老いては子に従えと。

知られざる

陸軍の秘密水上特攻艇

福岡県 角 谷 数 茂

大東亜戦争の開戦間もない、翌昭和十七（一九四二）年四月、豊津中学校に入学した。この入学当時はまだ戦勝ブームの最中であつたが、二年生、三年生になると様相が変わってきた。あの頃の年代の人々が経験した学徒勤労動員で、農作業や基地築城、曾根飛行場（現在の北九州空港、新北九州空港開港後閉鎖）の建設に汗を流したものである。

それから私は旧国鉄の小倉工場の工機部旋盤の職場に配属されていたが、当時国が公募していた「陸軍船舶特別幹部候補生」を受験した。

最年少の志願兵として、ひたすら純粹に国のために応募したものである。そして合格、中学三年生、十五歳の時であつた。その日は寒風と共に

雪が降りしきる冷たい朝であった。

上陸した港は、『二十四の瞳』で今はすっかり有名になった観光地の小豆島土庄港、そこには我々若者を待つ、その名も若潮部隊があった。昭和二十年二月のことである。

入隊式の食事に赤飯が支給されたと思ったら「こうりゃん」入りの飯であった。陸上訓練は当然ながら船舶兵科必須の手旗信号、機関学、気象学、船舶舟艇の訓練などが寒風を突いて行われ、精神修養も合わせてなされた。

やがて原爆の地、広島沖合にある江田島の幸の浦の特攻教育隊に転属し、明日への生命も知れぬ特攻隊員として教育訓練を叩き込まれました。私達の艇は「甲四型肉迫攻撃艇」と言い、船体はベニア板、エンジンは自動車用であった。これに爆雷を搭載し夜間敵の停泊地に侵入し、艦船に体当たり撃沈するという戦法である。

軍秘上、連絡艇の頭文字をとって、「マルレ④」と呼んでいた。一通りの訓練を終え、本土決

戦に備え、海上挺進戦隊として各地に展開していた。

私は暁（陸軍船舶兵科の呼称）第一九八四八部隊、海上挺進隊員として、糸島郡前原町加布理海岸の特攻基地に配置された。

やがて、宿営地の門司港で、八月六日に広島の新爆弾（原爆）投下による大被害、続いて長崎原爆で決定的終戦の玉音放送を、そして神州不滅と信じていた日本の敗戦を上官より聞いた。

しかし、我々の戦隊では混乱は起こらなかった。新造の④艇を焼却、身辺を整理し、お互いの再会を約して復員し、再び母校に戻りペンを手にした。

今次大戦で多大の犠牲者を出したが、私達船舶特幹生もその例外ではない。フィリピン、沖繩で多数の戦死者、広島での救護活動、死体処理、そのため原爆病を得た者もいる。

学生服を軍服に着替え、僅か半年の軍隊生活で

あつたが、真珠湾攻撃に始まる海軍の特殊潜航艇や神風特攻、人間魚雷「回天」「震洋」などのほかに、陸軍にもそれは、それは、多大の戦死者を出したし、それと同時に余り知られていない「秘密の水上特攻隊」が存在していたことを知って頂きたい。

あの戦争が無かったら死なずに済んだのに、十五歳から十九歳位の紅顔の少年ばかりが特攻隊員として死んでいったという悲惨なものであつた。今、この悲惨さから死なずに済んで生存した人々が、それぞれの分野で活躍されているのを見ると、若くして生命を失った人に思いを馳せ残念でならない。

我々が、青春の血を燃やした小豆島、八幡山の中腹、瀬戸の海を見渡す所に、私達の浄財で建てた鎮魂の碑「若潮の塔」と青春の群像である「ブロンズ像」三体「学徒姿、訓練姿、出撃姿」がある。これは二十四の瞳、平和の群像の同じ作者で、彫塑界の鬼才、矢野秀徳氏会心の作品である。

また、兄をフィリピンで亡くした弟さんが、遺骨替わりにと、現地の人々の協力で持ち帰った①のエンジンが安置されているので、小豆島を訪れる人々は観光の傍ら、この丘に登り故人の冥福を祈り、平和祈願を捧げて頂ければ幸いである。

今日の平和日本のあるのは、今次大戦で犠牲になられた多くの方々のお陰と肝に銘じ、夢忘れることなく、我々の事実を後世に残したいものである。

最後に言う。『戦争は絶対にかん』……今も地球のどこかで、硝煙の匂いが消えない。……世界平和を願っている。

私達はこの事実を一人でも多くの人にお知らせすることにより、若くして散っていった勇士への鎮魂になればとの思いからお伝えしているのです。「あとがき」

① 陸軍が行った海上特攻

米軍を震撼させた挺進爆雷隊

昭和十九年二月、米軍はマリアナ群島・ニュー

ギニア西部に進出、フィリピンはもはや目前に晒されていた。やがては沖縄侵攻も予測されるなど、戦局は日本にとって誠に憂慮すべき状況にあった。

既に我が航空戦力の消耗ははなはだしくて、敵の進撃を阻止するには、敵船団を上陸する前に撃破する以外になかった。ここにおいて、同年七月、陸軍海上挺進隊が結成され、訓練が開始されたのである。

この陸軍海上挺進隊は国軍の大きな期待を担って短期間に部隊を編成、不慣れな海上において無防備の特攻艇を操らねばならなかった。

勿論、生還を期することはできない。しかしこうした不利な条件下で、敵船艇を撃沈すること数十隻という嚇々たる戦果を挙げたのだ。

しかしこの部隊の存在は、当時の隠密部隊として、まったく世に発表されないうちに終わっている。そして青春のすべてを投げうって鬼神のごとき攻撃を敢行し、再び帰らざる者千六百三十六人の多きに及んだ。

陸軍海上艇進戦隊の業績は、その家族と国家を憂う純粋な心とともに、永く歴史に留めなければならぬ。